



No.52

2001年11月発行

新潟県支部報

マイ スコープ

妙高山麓

中頸城郡妙高村 勝俣将明

今年度の県支部総会は、6月2、3日の1泊2日という日程で、新緑の美しい国立妙高少年自然の家を会場に開催された。

自然の家は、標高2,454mの妙高山の麓に位置しており、施設をとりかこむようにスギ、カラマツの人工林、コナラ、ミズナラ、クリなどから構成される雑木林が広がっている。また、国立公園内にあることから動植物が守られ、その結果種類も数も豊富である。生息する動植物の中には環境庁のレッドデータブックの中で絶滅危惧種とされている生物も何種類か見られる。野鳥も夏鳥では、オオルリ、キビタキ、サンコウチョウ、クロツグミ、ノジコ等人気の鳥たちも頻繁に観察できる。また、夜には森の中からフクロウの鳴き声が聞こえ、電灯に集まる昆虫を狙って飛ぶヨタカの姿も見ることができる。

さて、第24回の支部総会も6月2日に無事終わり、3日の早朝5時より恒例の探鳥会が行われた。探鳥会の始まる30分ほど前、東の空が明るくなり、ちょうど妙高連山の峰々が紅く染まった頃、自然の家のサービス棟裏のスギ林からアカショウビンの心地よい鳴き声が聞こえ始めた。

探鳥場所は、自然の家から車で5分ほど上がった関温泉駐車場から関、赤倉線を歩くコースとそこからさらに15分ほど上がった燕温泉から関見峠まで歩く2コースに別れて行われた。

どちらのコースも谷を見下ろしながら歩くコースで、木々の頂で囀るオオルリの美しい姿を目線と同じ高さで見ることができ、その美しい歌声をじっくり堪能することができた。また、ウリハダカエデやヤマモミジ、サワグルミなどの柔らかい日差しの差し込む広葉樹の森の奥からは、キビタキの黄色い姿を見ることができた。妙高山の外輪山の1つ前山のブナ林からは、ツツドリ、ホトトギスの声が深い谷にこだましながら聞こえ、青々と澄みきった空にはイワツバメが気持ちよく飛翔する姿を見ることができた。

私はこの4月から自然の家に勤務することになった。自然の家の週辺でも鳥を見るには充分であるが、実はさらにお薦めのコースがある。そのコースは、自然の家から徒歩で1時間ほどかかる「藤巻山」である。藤巻山は、そのほとんどがブナの原生林であり、谷には幕ノ沢という溪流が流れている。アカショウビンが繁殖し、クマタカを観察することもできる。ブナの芽吹き の時期には、オオルリ、キビタキ、クロツグミ、コジュウカラ、ヒガラなどを観察することができる。

今まさに、藤巻山は紅葉の時、黄金色に染まったブナ林に赤く色づいたモミジやヤマウルシのコントラストがとても鮮やかである。



刈羽黒姫山における繁殖期の鳥類

南蒲原郡栄町 渡辺 央

筆者は新潟県内のまだ未調査の山岳の繁殖期の鳥相と生息状況を調査しており、これまで、守門岳、栗ヶ岳について報告し（渡辺、1992;1994）、1999年には県北部の五頭山についても調査を行った（印刷中）。

今回報告する黒姫山（889m）は新潟県中央部からやや南に位置する柏崎、刈羽平野に面した米山山地に連なり、日本海に近い米山（993m）から内陸に向けて尾神岳、兜巾山、鷹の巣山と尾根で連なる中で最も内陸に位置する。この地域からさらに内奥の東頸城丘陵一体は、低標高地のブナ林が比較的残存している地域であり、黒姫山も米山山地の中では中腹から山頂付近にかなりまとまったブナ林が見られることで知られている（新潟県、1987）。

黒姫山の鳥類については山の紹介に併せて報告が見られる程度で（小林、1998）、これまでまとまった調査は行われていない。同時に、丘陵地のブナ林がほとんど姿を消した中で、そのブナ林がまだ残る本山地における鳥類の調査は、低山帯ブナ林の鳥類群集を知る上で意義があると思われる。

調査地

調査地は高柳町の磯之辺と白倉口、柏崎市の清水谷と折居からの合わせて4コースで登山道をいずれも山頂まで行った。

磯之辺から山頂までのコースは、集落をすぎて標高490mのキャンプ場から登る。ヤマザクラ、コナラ、などの亜高木とタニウツギ、オオバクロモジなどの低木が混交する二次林を経て、標高600m付近にはアカメイタヤの純林が出現し、その周りにはブナの亜高木、杉の高木林がある。標高680m付近からブナ林に入り、標高780mから840mの鶴川神社までの間には胸高直径40～50cm級のブナから成る林になる。林内にはオオカメノキ、オオバクロモ

ジ、カエデ、ユキツバキなどの低木や亜高木が交じるが、亜高木層は全体に貧弱である。鶴川神社から山頂までは同じく樹高のあるブナの成林が続く。

同じ高柳町の岡田から白倉口を経て山頂までのコースは他のコースに比べてブナ林が最も広く分布している。標高350m付近からブナの純林に入る510m付近までは、イタヤカエデ、ミズナラ、ケヤキなどの二次林にスギ林やスギ植林地が50～60%の割合で見られる。ブナ林は標高730m付近の黒姫峠までは林床に一部ササが入るが、全体にオオカメノキの幼樹などの低木が疎らに入る所が多く、林床は比較的開けている。黒姫峠から鶴川神社までは低木林が密に入る極相林に近いブナ林が連続するようになる。

柏崎市の折居から山頂までは、ホオノキ、ミズナラ、ブナ、ハウチワカエデなどの亜高木、ミズナラ、オオカメノキ、オオバクロモジ、ユキツバキ、などの低木が優占する二次林が続く。ブナ林は他のコースに比較して最も貧弱で、山頂に近い標高800m付近から尾根づたいに急傾斜の山腹に出現する程度にすぎない。

清水谷から山頂までは、ブナ、ミズナラ、イタヤカエデなどの亜高木とユキツバキ、オオカメノキ、リョウブなどの低木林が優先する二次林である。ブナ林は白倉口と分岐する黒姫峠から山頂まで分析する。

調査は1994年と1995年に行った。各調査コースの調査年月日と調査時間は高柳町の磯之辺～山頂は1994年5月8日（9時20分～10時50分）、6月7日（7時15分～8時50分）、白倉口～山頂は1996年6月29日（8時12分～11時28分）、柏崎市折居～山頂は1995年5月29日（7時30分～10時10分）、清水谷～山頂は1995年6月7日（7時20分～10時32分）にそれぞれ行った。

各調査ともラインセンサス法にしたがい、各コースとも往復同じように両側(片側50m)に出現した鳥類の種類、個体数、周りの環境、標高を記録した。磯之辺～山頂の2回の調査では出現種の個体数は多い方を採用した。個体数密度は時間当たりで算出し、ブナ林と二次林の出現個体数密度もそれぞれの単位調査時間当たりで算出した。

調査結果

1. 出現コースと個体数

今回の4コースの出現種数は合計6目24科43種であった(表1)。タカ目2種、キジ目1種、ハト目2種、ホトトギス目3種、キツキ目も3種、スズメ目32種であった。

各コースにおける出現種数は磯野辺コースの33種がもっとも多く、折居コースの16種がもっとも少なかった。4コースすべてに出現した種類(調査圏外も含む)は、カッコウ、ホトトギス、アオゲラ、サンショウクイ、ヒヨドリ、クロツグミ、ウグイス、キビタキ、オオルリ、ヒガラ、ヤマガラ、シジュウカラ、メジロ、ホオジロ、イカル、カケスの16種類であった。

一方、1コースにしか記録されなかった種は、アオバト、トラツグミ、アトリ、シメの4種であった。アトリとシメは新潟県には冬鳥として渡来するが、シメは渡り前と思われる5月8日に磯野辺の調査で観察された。アトリは6月7日の清水谷コースで山頂付近のブナ林で雄1羽が観察されたものである。

出現種の各コースにおける個体数密度は、種類数と同様に磯野辺コースの56.2羽が最も多く、折居コースの13.8羽が最も少なかった。各コース間の個体数密度には有意差があった(X^2 29.1 > 0.05)。

各コースの優先度上位3種とその個体数密度を見ると、磯野辺コースでは、シジュウカラ(20.1%)、アカゲラ(7.8%)、ヒヨドリ(6.8%)、折居コースでは、ヒヨドリ、シジュウカラ、ホオジロ(各13.8%)、清水谷コースでは、シジュウカラ(17.3%)、ヒヨドリ(9.9%)、ア

オバト(6.4%)、白倉コースでは、ヒヨドリ(12.5%)、シジュウカラ(10.2%)、ウグイス(8.0%)であった。

4コースあわせた全体では、シジュウカラが16.8%を占め最優占し、続いてヒヨドリ(9.5%)、ウグイス(5.2%)、メジロ(4.6%)、キビタキ(4.3%)の順に優占度は高かった。そして、上位3種の合計優占度は31.5%であった。

2. 二次林とブナ林における出現状況

各コースの途中から山頂にかけて分布するブナ林と、ブナ林に入るまでの間の二次林に出現した鳥類の出現状況を調べてみた(表2)。まず出現種類数は二次林が32種、ブナ林が35種であった。

各コース別に見るとブナ林が少ない折居コースでは、二次林に13種が出現したのに対して、ブナ林には7種であった。一方、コースに最も多くブナ林が分布する白倉コースでは、二次林の13種に対して、ブナ林には24種が出現した。二次林に出現してブナ林に出現しなかった種は、アオバト、キセキレイ、オオヨシキリ、ノジコ、カワラヒワの5種であった。一方、ブナ林だけに出現した種は、コゲラ、イワツバメ、コルリ、トラツグミ、コサメビタキ、ヒガラ、アトリの7種であった。他の27種は両林相に共通して出現した。

次に、個体数密度に付いてみると、全体では二次林が35.8羽、ブナ林が36.8羽で、両林相間で有意差はなかった。各コース別のブナ林の個体数密度は、ブナ林が少なく気象条件の悪かった折居コースを除く他の3コース間のブナ林には有意差はなかった(X^2 29.1 > 0.05)。

各種について二次林とブナ林の優占度上位種を見ると、二次林では、ヒヨドリ(14.2%)、シジュウカラ(12.6%)、ウグイス(9.8%)、ホオジロ(6.7%)、メジロ(6.5%)の順であった。ブナ林では、シジュウカラ(21.5%)、ヒガラ(8.7%)、アカゲラ(5.2%)、キビタキ(5.2%)、ヒヨドリ(4.6%)の順であった。本地域のブナ林ではヒヨドリも優占度の上位には行っているが、ムクドリが磯野辺コース

や清水谷、白倉の各コースに出現し、磯野辺コースのブナ林には2つがいがブナの樹洞で営巣しているのが確認された。

考 察

本山地はこれまで調査した守門岳や粟ヶ岳(渡辺、1992;1994)と比較して標高が1000mに達しない低山であるが、ブナ林が発達している点で、山地におけるブナ林の分布と鳥類の生息状況を知る上で興味を持たれる山である。

出現種類数は43種で、標高1000m以上の守門岳の61種、粟ヶ岳の57種と比べて少なかった。標高がやはり1000m以下の五頭山(974m)の45種(渡辺、印刷中)に近い種数である。五頭山も山頂付近にはブナやミズナラ林が発達している点で黒姫山と似た林相が見られるが、五頭山に出現して今回の黒姫山に出現しなかった種は、ハチクマ、アオバズク、ヨタカ、アカショウビン、カワガラス、コガラ、ノスリ、センダイムシクイ、アカハラ、ジュウイチ、マミジロ、ハリオアマツバメ、クロジ、ウソの14種である。

標高とブナ林の関係から見ると、コガラ、ジュウイチ、マミジロ、クロジ、ウソ、などはいずれも五頭山の標高800以上のブナ・ミズナラ林に出現していることから、黒姫山と五頭山の標高差が関係している可能性もある。

クロジは標高1000mに近い五頭山には生息していたが、黒姫山と標高の近い909mの菅名岳には記録されていない(山本ほか、1992)。クロジの生息は、標高に強く関係していると思われる(新潟県、1987;渡辺、1992)。

また、ブナ林ということからキツツキ類の生息に注目すると、黒姫山全体のアカゲラの生息密度は1.6羽、最も密度の高かった磯野辺コースでは、4.4羽であった。これはブナ林などの少ない粟ヶ岳の0.2羽や五頭山の0.1羽などと比較して高いし、守門岳のブナ林地帯(800~1000m)の0.8羽に比べても高かった。しかし標高が近似した菅名岳のブナ林では1.9羽が出現している(山本ほか、1992)。

また、森林性でブナ林に広く生息するシジュウカラ類についてみると、シジュウカラの平均生息密度は、守門岳のブナ林で2.3%、粟ヶ岳0.6羽、五頭山1.6羽であるが、菅名岳のブナ林では7.7羽が記録され、黒姫山ブナ林の7.9羽に近かった。

ヒガラについては、黒姫山のブナ林では平均3.2羽で、菅名岳の3.0羽に近いが、標高の高い守門岳では、2.0羽、五頭山では1.8羽で、黒姫山よりも少なかった。

同じようにブナ林に広くみられるコルリは、黒姫山では、0.4羽であった。この値は守門岳2.6羽、粟ヶ岳2.1羽、五頭山1.5羽菅名岳1.5羽などと比べて明らかに少なかった。本種もブナ林帯の標高を反映して黒姫山では生息密度は高くないように思われる。

次にキビタキについてみると、黒姫山の1.4羽に対して守門岳では、1.0羽、五頭山では、0.2羽、菅名岳では1.0羽、五頭山では0.2羽、菅名岳では1.5羽で標高の高い山地のブナ林よりも低いブナ林で密度が高い。つまり、キビタキは黒姫山のブナ林ではアカゲラ、シジュウカラと並んで生息密度の高い種と出ることが出来る。

繁殖期の鳥類群集を出現鳥類の優占度上位種で類型化した由井(1976)にしたがえば、黒姫山全体ではシジュウカラーヒヨドリーウグイスーメジローキビタキ群集である。また、二次林とブナ林に分けてみると、二次林ではヒヨドリーシジュウカラーウグイスーホオジローメジロ群集で、この構成は例えば守門岳の二次林帯(500~800m)のヒヨドリーウグイスーホオジローヤブサメーカケス群集と、上位3種は共通している。そして、ブナ林では黒姫山のシジュウカラーヒガラーアカゲラーキビタキーヒヨドリ群集に対して、守門岳の800~1000mのブナ林の、シジュウカラーヒガラーカケスーコルリーキビタキ群集の上位2種とキビタキが共通している。つまり、黒姫山の繁殖期の鳥類は低山帯の二次林と低標高地のブナ林に優占する鳥類群集の特徴を示すと言える。

表2. 各調査地域における二次林とブナ林の出現鳥類と個体数/時間

種名	磯野辺		折居		清水谷		白倉		合計	
	二次林	ブナ林								
1 トビ		1.0			0.6	1.3			0.2	0.6
2 サシバ	2.0		0.5			0.7			0.6	0.2
3 ヤマドリ										
4 キジバト		1.0			0.6		1.0		0.2	0.5
5 アオバト	2.0				4.1				1.5	
6 カッコウ										
7 ツツドリ										
8 ホトトギス	4.0	2.0	0.5			2.7	1.0		1.1	1.4
9 アオゲラ		1.0			0.6	1.3	0.5		0.2	0.7
10 アカゲラ	6.0	4.0				2.0	1.5		1.5	1.9
11 コゲラ		2.0					0.5			0.6
12 ツバメ	2.0						0.5		0.5	0.1
13 イワツバメ						1.3	1.5			0.7
14 キセキレイ	2.0						1.0		0.8	
15 サンショウクイ	2.0		0.5			1.3			0.6	0.3
16 ヒヨドリ	2.0	4.0	2.5		5.9	0.7	10.0	2.0	5.1	1.7
17 モズ	2.0						0.5		0.5	0.1
18 ミソサザイ		1.0			0.6	0.7			0.2	0.4
19 コルリ				2.9		1.3	1.0			1.3
20 トラツグミ							0.5			0.1
21 クロツグミ					1.8	1.3	1.0	0.5	0.7	0.5
22 ヤブサメ					1.8	0.7	1.0	1.0	0.7	0.4
23 ウグイス	8.0		1.0		1.8	0.7	3.0	2.0	3.5	0.7
24 オオヨシキリ							1.0		0.3	
25 メボソムシクイ		3.0	0.5	0.5	0.6	0.7			0.3	1.1
26 キビタキ	4.0	2.0		0.5		2.7	1.0	2.5	1.3	1.9
27 オオルリ	2.0	1.0	0.5	0.5	0.6	0.7	1.0		1.0	0.6
28 コサメビタキ		1.0				0.7				0.4
29 エナガ	4.0	2.0			0.6		2.5		1.2	1.1
30 ヒガラ		3.0		4.3		4.0	1.5			3.2
31 ヤマガラ	2.0	1.0	1.0	1.4	0.6	4.7	1.0		1.2	1.8
32 シジュウカラ	16.0	10.0	0.5	5.7	0.6	12.0	1.0	4.0	4.5	7.9
33 メジロ	2.5		0.5		2.9	0.7	3.0	0.5	2.2	0.3
34 ホオジロ	2.0		2.5		1.2		4.0	1.0	2.4	0.3
35 ノジコ	2.0				0.6				0.7	
36 アトリ		1.0								0.3
37 カワラヒワ	2.0								0.5	
38 イカル	2.0	1.0				1.3	2.0	2.0	1.0	1.1
39 シメ		1.0								0.3
40 ニュウナイスズメ	2.0	2.0				2.7	1.0		0.5	1.4
41 ムクドリ		4.0			1.2	0.7	1.5		0.3	1.6
42 カケス		1.0	0.5		0.6	2.0	1.0		0.3	1.0
43 ハシブトガラス	2.0		0.5			2.0			0.6	0.5
合計	74.5	49.0	11.5	15.8	27.3	50.9	30.0	31.5	35.8	36.8

表1. 黒姫山の各調査地における出現種と個体数/時間

種	名	磯野辺	折居口	清水谷	岡田	平均	
1	トビ	Milvus migrans	0.6	0.3		0.2	
2	サシバ	Butastur indicus	0.6	0.7	0.3	0.4	
3	ヤマドリ	Phasianus soemmerringii	(0.6)	(0.4)			
4	キジバト	Streptopelia orientalis	0.6	(0.4)	0.3	0.2	
5	アオバト	Sphenurus sieboldii			2.2	0.6	
6	カッコウ	Cuculus canorus	(0.6)	(0.4)	(0.3)	(0.3)	
7	ツツドリ	Cuculus saturatus	(0.6)	(0.4)	(0.6)	(0.6)	
8	ホトトギス	Cuculus poliocephalus	2.5	0.4	1.3	0.9	1.3
9	アオゲラ	Picus awokera	0.6	(0.4)	0.9	(0.3)	0.4
10	アカゲラ	Dendrocopos major	4.4		0.9	0.9	1.6
11	コゲラ	Dendrocopos kizuki	1.3			0.3	0.4
12	ツバメ	Hirundo rustica	0.6			0.3	0.2
13	イワツバメ	Delichon urbica			0.6	0.9	0.4
14	キセキレイ	Motacilla cinerea	0.6			0.3	0.2
15	サンショウクイ	Pericrocotus divaericatus	0.6	0.4	0.6	0.3	0.5
16	ヒヨドリ	Hypsipetes amaurotis	3.8	1.9	3.4	3.3	3.1
17	モズ	Lanius bucephalus	0.6			0.3	0.2
18	ミソサザイ	Troglodytes troglodytes	0.6	(0.4)	0.6		0.3
19	コルリ	Luscinia cyane		0.7	0.3	0.6	0.4
20	トラツグミ	Zoothera dauma				0.3	0.1
21	クロツグミ	Turdus cardis	(0.6)	(0.4)	1.6	0.6	0.6
22	ヤブサメ	Urosphena squameiceps		(0.4)	1.3	0.9	0.6
23	ウグイス	Cettia diphone	2.5	0.7	1.3	2.1	1.7
24	オオヨシキリ	Acrocephalus arundinaceus		(0.4)		0.3	0.1
25	メボソムシクイ	Phylloscopus borealis	1.9	0.7	0.6		0.8
26	キビタキ	Ficedula narcissina	2.5	0.4	0.9	1.8	1.4
27	オオルリ	Cyanoptila cyanomelana	1.3	0.7	0.6	(0.3)	0.7
28	コサメビタキ	Muscicapa dauurica	0.6		0.3		0.2
29	エナガ	Aegithalos caudatus	2.5		0.3	1.5	1.1
30	ヒガラ	Parus ater	1.9	1.1	1.3	0.9	1.3
31	ヤマガラ	Parus varius	1.3	1.1	1.9	0.3	1.2
32	シジュウカラ	Parus major	11.3	1.9	5.9	2.7	5.5
33	メジロ	Zosterops japonica	2.5	0.4	1.9	1.2	1.5
34	ホオジロ	Emberiza cioides	0.6	1.9	0.6	1.8	1.2
35	ノジコ	Emberiza sulphurata	0.6	(0.4)	0.3		0.2
36	アトリ	Fringilla montifringilla	0.6				0.2
37	カワラヒワ	Carduelis sinica	0.6				0.2
38	イカル	Eophona personata	1.3	(0.4)	0.6	1.8	0.9
39	シメ	Coccothraustes coccothraust	0.6				0.2
40	ニューナイスズメ	Passer rutilans	2.5		0.6	0.6	0.9
41	ムクドリ	Sturnus cineraceus	2.5		0.6	0.9	1.0
42	カケス	Garrulus glandarius	0.6	0.4	1.3	0.6	0.7
43	ハシブトガラス	Corvus macrorhynchos	0.6	0.4	0.6		0.4
合計		56.2	13.8	34.2	26.4	32.7	

() 内の個体数は調査範囲外に出現したもので個体数の集計からは除いた。

要 約

刈羽黒姫山の繁殖期における鳥類の生息状況を明らかにするため、1994～1996年までの繁殖期（5～6月）に9回調査を行った。

1. 出現した鳥類は、6目24科43種で、タカ目2種、キジ目1（いち）種、ハト目2種、ホトトギス目3種、キツツキ目3種、スズメ目32種であった。

2. 出現種のうち優占度上位種と優占度は、シジュウカラ（16.8%）、ヒヨドリ（9.5%）、ウグイス（5.2%）、メジロ（4.6%）、キビタキ（4.3%）の順であった。

3. 出現鳥類を二次林とブナ林に分けてそれぞれの出現状況を調べた結果、出現種類数と個体数密度は、それぞれ二次林で32種、35.8羽、ブナ林で35種、36.8羽であった。二次林だけに出現した種は、アオバト、キセキレイ、オオヨシキリ、ノジコ、カワラヒワの5種、一方、ブナ林だけに出現した種は、コゲラ、イワツバメ、コルリ、トラツグミ、コサメビタキ、ヒガラ、アトリの7種であった。

4. 二次林とブナ林のそれぞれの優占度上位種と優占度を見ると、二次林では、ヒヨドリ（14.2%）、シジュウカラ（12.6%）、ウグイス（9.8%）、ホオジロ（6.7%）、メジロ（6.5%）、で、ブナ林では、シジュウカラ（21.5%）、ヒガラ（8.7%）アカゲラ（5.2%）、キビタキ（5.2%）、ヒヨドリ（4.6%）であった。

文 献

- 小林成光 1998. 刈羽黒姫. 野鳥新潟（103）：5.
由井正敏 1976. 森林性鳥類の群集構造解析Ⅰ. 山階鳥研報, 8（3）：1～26.
渡辺 央 1992. 守門岳の鳥類（繁殖期）. 長岡市立科学博物館研究報告, 27：73～84.
渡辺 央 1994. 粟ヶ岳の鳥類. 長岡市立科学博物館研究報告, 29：45～54.
渡部 通 1991. 日尊の倉山の鳥類. 四季のつどい, 17：4～6.
山本 明・渡辺範雄・小野島学
1992. 菅名岳の鳥類. 日本野鳥の会支部報, 33：34：12～19.

所変われば鳥変わる

～佐渡の鳥たち～

佐和田町 末崎 朗

3年前から私は日本の島を巡る旅行をしてきました。平成10年に北海道の利尻島・礼文島、平成11年には今噴火で大変なことになっている東京都三宅島、平成12年には鹿児島県屋久島、いずれも自然の残されている美しい島々でした。しかし、島めぐりの4年目にあたる今年、島に住むことになるとは思っていませんでした。

平成13年の4月1日から勤務で佐渡に住むことになりました。口の悪い人々は佐渡への転勤を鳥流しなどと言うようですが、私の趣味がバードウォッチングであることを知っている友人は、「日々いいなあとうらやましがります。地方公務員の私には転勤がつきものとはいえ引越しは正直面倒くさいのですが、いろいろな地域に住んで鳥を見ることができるのは大きな喜びでもあります。まだ佐渡に暮らし始めて半年あまりしかたっておらず、情報不足の面も多いとは思いますが、それでも鳥に関して新鮮な驚きを感じた面が多々ありました。佐渡は新潟県ですが野鳥の会の支部は別で、細かい情報はわからなかったのが現状であった気がします。ここでは私が見聞きした佐渡の鳥たちについてレポートしたい

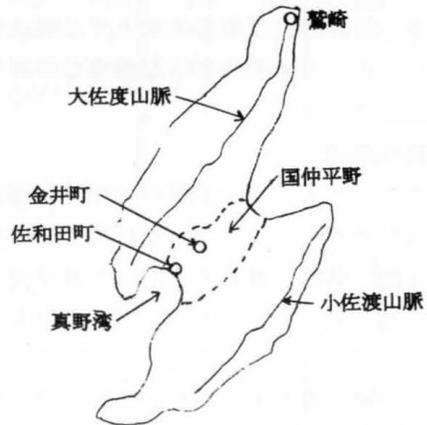


図1 佐渡平面図

と思います。

1 真野湾

佐渡に来る前まではあまり意識してなかったのですが、比較的単調な新潟県の海岸線には佐渡を除いて、まわりを陸に囲まれた海、つまり湾という環境がありません。また私は湾という環境が鳥の種類に影響を与えるということもあまり考えていませんでした。

引越しが一段落した4月7日に真野湾に鳥を見に行っただけ私を出迎えてくれたのは、40羽程のアビの群れでした。それまで私が一度に見たアビの数は2～3羽がせいぜいで、まして4月にこんな数のアビを見られるとは予想もしていませんでした。後で佐渡支部の方に聞くとここでは、冬にアビのみならずオオハム、シロエリオオハムが見られ、さらに今年にはハシジロアビまで見られたそうです。まさにアビ類の宝庫とっていい状態です。

湾内の浅い海が餌である魚を豊富に育み、冬の厳しい波からもアビたちを守っているのでしょうか。今度の冬にじっくりと観察したいと思っています。さらに15羽程のクロガモの他、数は少なかったもののホオジロガモやスズガモもみられ、越後側の4月の海で見られる鳥とは趣きが違うという印象を受けました。また4月11日に湾内の別の場所に鳥を見に行くと、ウミアイサの雄2羽とメス3羽が陸に上がって気持ちよさそうに眠っているのを見ました。そんな光景を見たことがなかった私は、真野湾には魚を主食とする潜水性の鳥たちにとって楽園のような環境なのかもしれないと思いました。

2 鷺崎周辺

佐渡も日本海に浮かぶ島の一つで、春の渡りの鳥が通過することが十分に考えられます。ただ粟島、飛島、舳倉島といった渡り途中の珍しい鳥が見られる島々と比べ佐渡はあまり大きく、いったいどこに行けば効率よくそういった春の渡りが見られるのかわかりませんでした。

いくつかの岬を巡り、見つけたのが大佐渡

最北端に位置する鷺崎という集落の周辺でした。ここは弾野フィールドパークというオートキャンプ場を中心としたレクリエーション施設が近年にでき、自然環境も変化したようですが、それでも水田や畑があり雑木林も残っています。佐渡支部の方に聞いてみると、かなり前から春の渡り鳥を見る場所として有名であり、数年前にはにいがた野鳥の会の方々も訪れていたそうで、今年も東京支部の方々がバスで何十人も来ていました。知らないのは私だけだったかもしれません。私が4月21日から5月26日まで鷺崎周辺に何回か通って、観察した鳥を以下に記します。

ウミウ、ゴイサギ、アマサギ、チュウサギ、アオサギ、カルガモ、コガモ、ミサゴ、ハチクマ、トビ、ノスリ、ハヤブサ、キジ、コチドリ、タシギ、オオセグロカモメ、ウミネコ、キジバト、カッコウ、ツツドリ、ホトトギス、アマツバメ、ヒバリ、ツバメ、キセキレイ、ハクセキレイ、ピンズイ、サンショウクイ、ヒヨドリ、モズ、コルリ、ルリビタキ、ジョウビタキ、イソヒヨドリ、クロツグミ、アカハラ、シロハラ、ツグミ、ウグイス、シマセンニュウ、コヨシキリ、メボソムシクイ、キビタキ、オオルリ、コサメビタキ、サンコウチョウ、エナガ、コガラ、ヒガラ、ヤマガラ、シジュウカラ、メジロ、ホオジロ、カシラダカ、アオジ、カワラヒワ、マヒワ、ベニマシコ、イカル、シメ、ニュウナイスズメ、スズメ、コムクドリ、ムクドリ、コウライウグイス、ハシボソガラス、ハシブトガラス

計67種

このほかに同じ期間に他の人がツミ、アカショウビン、ツメナガセキレイ、コマドリなどを観察したようです。佐渡支部の方のまとめたこの地域の報告を後で見せてもらいましたが、観察鳥類は48科209種に及んでいます。その中にはマミジロタヒバリ、キマユムシクイ、シロハラホオジロ、シマノジコなどの大陸性の渡り鳥も多く含まれていて、佐渡が渡りの中継地として重要な位置を占めていることが実感できました。

3 山の鳥たち

今年の春はあまり山のフィールドには行かなかったのですが、島である影響からか低標高のいわゆる里山では、繁殖していると思われる鳥は種類、数ともにあまり多い印象ではありませんでした。

キツキ類では、アカゲラやアオゲラは繁殖していないと聞いていたのですが、実際にはコゲラもほとんどいないようで、オオアカゲラがほとんどを占めているのが実態のようです。ただしキツキがオオアカゲラ一種のわりには、島のあちこちでドラミングが聞こえたので、かなり生息数は多い印象です。

他にも新潟本土と生息状況が異なる鳥は多いようです。例えば、サシバは通過するのみで繁殖はしていないとのことで、それに代わりノスリが多く生息しているようです。またコジュケイが生息していますが、ノジコは通過するだけのようです。小佐渡山脈などでは特に景観的にほとんど頸城地方と変わらないような中山間地域が広がっており、わずかに数十キロメートルしか離れていないのにアオゲラもサシバもノジコもないのは本当に何か不思議な感じがします。

このように鳥という環境で生息が限られる鳥が多いなかで、特筆すべきは大佐渡山脈の標高700m付近にクロジが生息していることです。場所によってはかなり高い密度で生息しているようです。私の知っている限りでは新潟本土より低い標高からクロジが出始める感じですが、低地では佐渡は雪が少なく、雪に弱いといわれるコジュケイが生息していますが、高地では反対に比較的高いところに生息する鳥が、低い所から出始めるという興味深い状況となっているようです。

4 国仲平野

佐渡は大佐渡山脈と小佐渡山脈という二つの山脈にはさまれるようにして、国仲平野が広がっており、広い水田が見られます。私のアパートのある佐和田町はその国仲平野の西の端にあり、海からは1kmほど離れています。そこで朝の目覚まし代わりに私を起こしてくれたのはイソヒヨドリの美声でした。イソヒヨドリは日本では普通海岸部の鳥で平野部の鳥ではありません。しかし、佐渡では佐和田町より内陸にはいった金井町でも住宅地で普通に春のさえずりを聞くことができます。雄、雌ともに平野部で見られるので繁殖している

のは間違いのないようですが、いったいどんな餌をとって、どんなところに巣をかけているのか興味深いところです。今年はよくわからなかったので来年のシーズンは観察してみたいと思っています。



図2 イソヒヨドリ

もう一つこれは今シーズンに限られることなのかもしれませんが、興味深いことがありました。仕事で8月に国仲平野の真ん中を車で走っているとトビと一っしょに輪をかきながら飛んでいるワシの姿が目に入りました。後で佐渡支部の方に聞いてみると、春から見られているオジロワシの幼鳥らしいとのことでした。ところが話はそれだけにとどまりませんでした。佐和田町の私のアパートの近くで大規模な農地改良が行われる予定らしく、何十ヘクタールと耕作されていない水田があったのです。そこでコジュケイがさえずり、クイナが繁殖活動をしているというのです。もちろん普通佐渡の夏に見られる鳥ではありません。それを聞いてさっそく次の日に行きました。その2種は見られなかったのですが、タシギが2羽仲良く歩いているのを見ました。いままでになく環境ができたためとはいえ、こんなに冬鳥や普通見られない鳥が夏に見られるのはやはり佐渡が様々な鳥の渡りのルートになっているだけでなく、繁殖の機会をうかがう場所になっているということのようです。

このように、佐渡は鳥をめぐる状況が新潟本土とかなり異なっているようです。今後も注意しながら佐渡の鳥たちを観察していこうと考えています。

日本野鳥の会ネイチャースクール探鳥ツアー

「安西さんと行く憧れの中米コスタリカ」に参加して

新井市 畔上 功・京子

以前、TVのネイチャー番組でケツァールをはじめて見た時から、「いつか本物を見に行きたいね」と二人で話をし、野鳥誌が毎月届く毎にツアー欄をチェックしたり、旅行社にツアーカタログを請求したりしていましたが、なかなか日程的にあう日がありません。今年の春に長期休暇を予定していたので、今回のツアーを知り即申込みをしました。最小催行人数20名のところ、今回は14名でのツアーとなりました。



モンテベルデからカララへ

コスタリカという国はパナマの隣りに位置し、「中米の花園」と呼ばれる花と自然と人々が平和に暮らす50,700km²(四国と九州を合わせた程)、人口約350万の小さな国です。国土の1/4が国立公園や自然保護区で、地球上の全鳥類約9,300種の約10%が生息し、その1/3が繁殖していると言われています。しかも、非武装の永世中立国として中米諸国の平和維持に貢献している国であると言う事を今回はじめて知りました。

ツアー当日、5月26日(土)・午後1時30分、今回はネイチャースクールの安西さんと阪急交通社の山本さんとツアー参加者14名全員時間通り、空港第2ターミナルに集合。午後4時頃に出発し、約12時間をかけヒューストンへ。着くなり双眼鏡と望遠鏡を取り出し空港周辺にて鳥観察となりました。ツアーは年配の方が多かったのですが鳥観察に対する情熱には恐れ入りました。周辺を1時間あまり歩いた後、いよいよコスタリカの首都サンホセへ向け出発の予定が突然の暴風雨により2時間遅れ、ようやくサンホセのホテルに着いたのが現地時間で夜10時間過ぎ。サンホセの空港には現地のガイドのセルシオ氏、通訳の荒川さん、ドライバーのカルロスさんらのお迎えで早々にホテルへ。成田を出発してかれこれ18時間の長旅で、ホテルにチェックインするや否やダウンという状態でした。

今回は首都サンホセ、モンテ・ベルデ(緑の山?)、カララ、ラ・セルバ、そしてサンホセの5日間の旅でした。移動は全て専用のマイクロバス、人員が全員で19名(スタッフを入れ)の為、座席の余裕もあり快適でした。

まず、モンテ・ベルデ自然保護区に行くためサンタエレナの町へ向け出発、町を外れるや否や道路わきにはイグアナが木の上で日向ぼっこ、反対側の川沿いの木に尾羽の美しいハチクイモドキ。車を停めてじっくり観察、100メートルも歩くと何やら変な鳴声。道路わきの大きな木の上のほうにホエザルが鳴いている中での移動でした。車で約6時間をかけ到着、ホテルに入る前にエコロジカルファームをハキリアリに注意しながら散策し、夜はナイトウォッチング、翌朝は早朝の探鳥会とツアー中は朝から晩まで自然に触れ合うとても気持ちのいい時間でした。



クーパーコノハズク

中でもサンタエナーレの町、モンテ・ベルデ自然保護区ではケツァール、ヒゲドリ、サンショクキムネオオハシ、クリガシラオオツリスドリが特に印象深く残っています。特に、ケツァールは保護区に入ってからセルシオ氏が必死になって探してくれました。声は聞こえても（大きな声ではない）姿は見えません。リトルアボガドの木の周辺を中心に探しました。「いつも見る事ができると言うわけではない」と聞かされ、半分諦めかけていたその時現れました。しかも、オス・メスの2羽です。見えるポイントは1点（道幅は約1m、それ以外は立入禁止のためです。ジャングルのため、（木の葉が邪魔）、1台の望遠鏡で順番に全員が見る事ができました。それは写真と一緒に、とても綺麗な色と姿をしており、ジャングルの緑の中、ひときわ惹きつける緑色と赤でした。もう一つは嘴にヒゲをつけた真っ白な頭とチョコレート色の鳥で、全身を使って鳴いているのではと思わせるベルのような鳴声のヒゲドリでした。別名ベルバードといい、一人前に鳴けるまで7、8年もかかるそうです。野鳥誌8月号に載っています。



国立博物館

3日目だったと思いますが、入り江で車を

停め、鳥を見ていると近くに住んでいる人が自分の庭木に鳥がいるよと教えに来てくれました。4羽のクーパーコノハズクでした。人と鳥が仲良く生活しているように思えます。また、ある町の公園の木に野生のナマケモノがいて、その下で人々が午後のひと時を過ごしているというとてもゆったりとした時の流れを感じました。



色とりどりの小鳥の標本

最後に、国立博物館ではオオギワシがロッカーの上にゴロンと置かれている約20m²の研究室で鳥類研究者のフリオ氏に研究用標本を数多く見せていただきました。100年前のケツァールの標本も見せて貰いましたが、実際と変わらない色合いでした。ケツァールはグアテマラの国鳥で、コスタリカの国鳥はバフムジツグミ（とても地味な鳥）です。絶滅が心配されているヒゲドリが隣国のニカラグアではスープの材料になっている事なども初めて知りました。

特別に国民一人一人が鳥や自然に詳しいわけではないかも知れないけれど、自然を愛し、自然保護を誇りとし、国の政策として支持しているコスタリカの人々と国は非常にすばら



オオギワシの標本

しいと感じました。また、うらやましく思います。

美しい鳥たちを失うことの無いよう、自然を守る事は人間に与えられた義務と感じます。

ワシ・タカ類秋の渡り 探鳥会に参加して

五泉市 寺田友次

「あの雲の中程に4つ、ハチクマとサシバ。」
みんな一斉に双眼鏡をかまえる。いるいる。
ハチクマとサシバが上昇気流にのってゆっく
りと廻っている。と、すーっと頭上高く南を
目指して流れ、あつと言う間に空の彼方に見
えなくなる。

北西の遙か彼方の山頂付近に1羽、黒点の
様に見えたと思ったら、忽ち近くの鉄塔の上
へ。その数もまちまちで、異種のワシ・タカ
が混在しているのもある。

9月16日の探鳥会は、9時を過ぎる頃から
続々と集まりだした。小学生や家族同伴者な
ど40名余りが、夢中で空を見続けた。

昨夜からの雨は小千谷の山本山の展望台を
濡らしていたし、380度の展望は雲の量も多か
ったが、時間と共に雲も少なくなり、太陽が
輝くと最高の条件になってきた。気温の上昇
と共に主催者も「今日は出ますよ」と強気な
なって来たようだ。

今までも何度かこの山本山の渡りの会に來
ているが、天候が悪かったり風向きが反対だ
ったりで条件が合わず、満足な渡りを見た事
がなかった。今日も祈る様な気持ちで参加し
た。何鳥が何羽渡ったかのデータを取る余裕
もなく、ただただ山と雲と空を追い続けた2
時間でした。

どこでこの機会を待っていたのでしょうか。
今日渡ろうと身構えていた鳥は大体この時間
帯に飛び去ることのこと。

蜂採りの際に傷ついたのででしょうか、左右

の羽がいびつになったハチクマも、高く飛び
去ったが、無事に目指す遥かな地に到達する
ことが出来るだろうか。

自然の教えに従い、自然に溶け込んで生き
続ける鳥達のためゆまぬ継続の力を目の当りに
見つ、人々の生き方までにも思いを重ねつ
つ、今日の観察会に参加したことを喜んだ。

「まだこれからですよ。今日は天気がよく
なりそうだと思ったら、是非近日中に又來て
下さい。数え切れない程のワシ・タカが柱を
作って舞い上がりますから。」と誘って下さる
地元の方の声に、一層興味の湧くことしきり
となっていた。

「雲を越え青空高く渡る鳥」 寺田ユリ

参考までに篠田正則さんから頂いた当日の
観察数を記述する。(8時50分～12時10分)

サシバ	61	ハチクマ	16	ハイタカ	5
ツミ	1	ハヤブサ	1	ミサゴ	1
イヌワシ	1	合計	86羽		



事務局の住所・電話番号が変
更になりました。

新しい住所は下記の通りです。

発行 2001年11月1日 No.52

発行人 大島 基 編集者 小林成光、末崎 朗、千葉 晃

日本野鳥の会新潟県支部

事務局 〒950-0941 新潟市女池3丁目13番25号

TEL 025-285-2405 本間由紀子方 (振替口座) 00610-1-6002